

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	安藤真澄
最終学歴	学 位	専門分野
京都大学文学部哲学科社会学専攻	文学士	マーケティング・コミュニケーション

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

考えながら行動し、行動しながら考える人材の育成

【目標】

好奇心をもって自ら調べ、自ら考えることの楽しさに気づかせる

【方針】

小さな課題を与え、それを着実に達成させる。その達成感が自信に繋がり、次の学びに繋がる。

【計画（方法）】

初年度として、学生には手を動かして貰い、調べる、書く、発言する、議論するという循環を形にする。

【担当科目】

（前期）

メディアコンテンツ入門、上級マーケティング、総合演習Ⅰ、地域ビジネス特講Ⅴ、東邦プロジェクトB

（後期）

プレゼンテーション技術、総合演習Ⅱ、地域ビジネス特講Ⅵ、東邦プロジェクトA

○教育方法の実践

講義と質疑応答の繰り返し。次に課題を出して、講義内容を参考にしながら回答させる。その回答内容を踏まえ、次の講義でフィードバック。最後に定期テストを実施。総合演習と東邦プロジェクトでは講義の後に個人のワークの提出とプレゼン、その後にチームでのワークとプレゼンを実施。

○作成した教科書・教材

すべての講義でスライド資料を作成し、講義終了後にチームスに pdf をアップ。

○自己評価

学生によって講義内容の理解度や学習意欲に大きな差がある。レベル差の大きな集団に対して、講義形式で一様に学ばせることは難しい。一方、講義内容に関心のある学生の提出物のレベルが次第に上がって行くことには手ごたえを感じた。そこで問題となるのはどのレベルの学生をターゲットとするかである。

II 研究活動

○研究課題

広告の倫理の基本理念の探求

○目標・計画

【目標】

広告の倫理に関する理論書の出版

【計画】

先行研究、事例研究をもとに広告理論検討の枠組みを設定し、それを事例分析に当てはめる。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究実績（特許等含む）

2023 年度は以下

（著書）

なし。学術書出版助成に応募したが、獲得できなかった。

（学術論文） 2 本

- ・「中部圏のインバウンド観光再考—ポストコロナ期におけるアジア圏からの旅行者の志向性の変化について—」『東邦学誌』52（2）pp.13-47、2023 年 12 月、愛知東邦大学
- ・「顧客に寄り添う広告とは：マーケティング・コミュニケーションにおける「当事者性」の問題」『アカデミア』社会科学編、26、pp.177-202、2024 年 1 月、南山大学

（学会発表）

日本広告学会第 54 回全国大会、自由論題報告「顧客に寄り添う広告とは」2023 年 11 月、関東学院大学（横浜・関内キャンパス）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

吉田秀雄記念事業財団 2024 年度（第 58 次）研究助成申請済み

○所属学会

日本社会学会、日本広告学会、日本広報学会、日本マーケティング学会、日本社会情報学会

○自己評価

初年度で学生の習熟度レベルや反応に戸惑うこともあり、試行錯誤が続いたが、講義と研究の双方で一定の成果を上げることができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

大学のポジティブなイメージ形成の促進

【計画】

学生のモチベーションの把握、現状の対外イメージの把握、その対策の検討

○学内委員等

広報委員

○自己評価

高校生、大学生やビジネス界の多様なステークホルダーが大学をどのように見ているのかという視点で SWOT 分析を行い、アイデアを提案した。また、ゼミの課題として愛知東邦大学の広告ポスターを作成させるために大学のプロコンを作成させた。その結果、彼らが自分たちの大学をどう見ているかを知る機会となった。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

マーケティング・コミュニケーション及びPRの専門家としてアウトリーチ活動を行う。

【計画】

- ・定非営利活動法人中部プロボノセンター 広報セミナー講師
 - ・名古屋工業大学「女性技術者リーダー育成講座」講師
 - ・INNOVATORS GARAGE「次世代経営のための異業種交流会～変革をめざす中部圏企業の経営・管理層の集い～」パネリスト及びファシリテーター（中部経済連合会事業）
- 等で、地元の企業・団体での人材育成に資する活動を実施する。

○学会活動等

日本広告学会理事、日本広告学会及び日本広報学会の研究部会参加

○地域連携・社会貢献等

今年度は特定非営利活動法人中部プロボノセンター主催の広報セミナーは実施せず。

中部女性リーダーズサロン・インスパイアリーダーは年度途中で急遽参加を要請されたものである。他は予定通り実施した。

○自己評価

社会貢献活動では女性の社会参加支援の活動をサポートする事案が続いている。これはSDGsにも適うものであり、今後も継続する予定。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

高大連携で東邦高校生向けにマーケティング授業を実施。

VI 総括

着任前に学生の雰囲気について聞いていたとはいえ、教科書を買わない学生が普通であることに驚いた。授業中の私語は少なかったが、5分程度の遅刻者も多く、授業中にスマホを弄ることをやめられない学生も目に付いた。ノートの取り方を各講義のオリエンテーションで説明したが、大学にノートを持参することが想定外の学生もいた。気になったのは粘り強い思考を早々に諦める学生の存在である。

一方、真面目に課題に取り組み作成し、試験でも期待した回答をする学生も一定数おり、彼らの提出物のレベルが次第に上がって行くことには手ごたえを感じた。

母集団の習熟度のばらつきが大きい場合、講義でどのレベルの学生をターゲットにするかが課題となる。学生の興味関心を引くようなトピックスを選ぶことに苦心したが、能動的にコンテンツを見に行く習慣が乏しく、スマホ上を流れ去るコンテンツを漠然と受動的に見ている学生の多さが気になった。しかし、それも今時の若者の情報行動であろう。

初年度は総じてかなりの労力を学生の指導に割くことになり、試行錯誤の毎日であった。しかし、授業において、こちらの意図をきちんと受け止めて反応し、向上しようとする学生を見いだせたことは救いであった。

研究では研究会参加、学会発表を実施し、現地調査に基づくインバウンド観光に関する論文1本、広告の理論的研究の論文1本を上梓した。また、社会貢献活動として各種の講演も実施した。

初年度の忙しさの中で、教育、研究、社会貢献でそれぞれ一定の結果を出せたと考えている。

以 上